
町田は本当に「子育てしやすいまち」と言えるのか

——子どもマスタートップラン25-34・保育・学童・相談体制を、市民として小沢タケルが読み解く——

0. なぜ今、「子育てしやすさ」を“構造”から見直すのか

30代・40代で町田に暮らしていると、

- 共働きでフル回転しているのに、家計も時間もギリギリ
- 保育園・学童・習い事・塾…、子どもの予定表は常にパンパン
- 気がつけば、自分の時間も夫婦の時間もほとんどない

そんな感覚を、私自身も周りの友人たちから何度も聞いてきました。

一方で、市の広報やホームページには、

- 「子育て支援が充実」
- 「子どもにやさしいまち」

といった言葉が並びます。

「じゃあ実際、どこまで“できていて”、どこに“まだ抜けているところ”があるのか？」

ここを、感情ではなくデータと制度と生活実感で整理しておきたい。
それが、このレポートを書こうと思った理由です。

1. 「子どもマスタートップラン25-34」はどんな計画なのか

1-1 2015～2024の“第1ラウンド”から、2025～2034の“第2ラウンド”へ

町田市は2015年度から10年間、

「新・町田市子どもマスタートップラン(2015～2024年度)」を基盤に子ども施策を進めてきました。

その間に国では、

- 「子ども・子育て支援法」に基づく新制度
- 「子ども・子育て支援事業計画」
- そして2023年、「こども基本法」と「こども大綱」の閣議決定

など、子ども施策の枠組みそのものが大きく変わりました。

これを受け、町田市は2024年度で旧プランの期間が終わるのを機に、

2025～2034年度を対象とする新しい「町田市子どもマスターPLAN25-34」を策定しました。

1-2 国の「こども計画」としての役割

子どもマスターPLAN25-34の概要版には、こう書かれています。

- こども基本法第10条に基づき、「こども大綱」を勘案した市町村こども計画を作ることが求められている
- 本市では、この役割を「町田市子どもマスターPLAN25-34」が担う

つまりこれは、

「町田の子ども施策の“まとめ”」ではなく、
国が求める「こども計画」としての役割も持った“中核計画”

だということです。

1-3 「子どもにやさしいまち」をつくる3つの視点

計画策定の視点として、次の3つが明記されています。

1. 子ども視点のまちづくりの更なる推進
2. 「子どもにやさしいまちづくり事業(CFCI)」との一体的な運用
3. 「町田市子どもにやさしいまち条例(まちだコドマチ条例)」の推進

町田市は2021年度から、ユニセフの**「子どもにやさしいまちづくり事業(CFCI)」実践自治体**となり、

- コドマチ条例(子どもの権利・参加・居場所づくりに関する条例)
- 子どもの居場所づくり
- 子どもの参画の仕組みづくり

を進めてきました。

新しい子どもマスターplanは、これらを**バラバラではなく一本にまとめる“ハブ計画”**という位置づけです。

2. 計画の「目指す姿」と基本目標をかみ砕く

2-1 目指す姿:2つのフレーズ

概要版では、「子どもにやさしいまちの実現」という基本理念のもと、“目指す姿”として次の2つが掲げられています。

子どもが「やりたい！」を見つけ、挑戦できるまち
みんなが笑顔で安心して、子どもと一緒に過ごせるまち

私はこの2行を見たとき、

- 「やりたいことを見つけて、何度も挑戦できる子ども」
- 「その子どもを支える大人にも余裕があり、笑顔でいられる社会」

という、子どもと大人の両方に焦点を当てたメッセージだと感じました。

2-2 基本目標:子ども・若者・保護者・地域を全部含める

基本計画の体系を見ると、

子どもマスターplan25-34は、次の3つの基本目標を掲げています。

1. 子どもが、人との関わりや様々な経験を通して成長している
2. 自分らしさが尊重され、すべての子どもや若者が活躍している
3. 「子どもの権利」が大人にも子どもにも認知され、定着し、守られている

さらに、保護者や家庭に関する目標として、

- 安心して出産を迎え、子育てできる
- 仕事をしている保護者が、子育てに喜びを感じることができる
- ニーズに合った支援を受けることができる

といった文言も並びます。

子どもだけでなく、若者・保護者・地域を含めて「子ども分野の総合計画」とする。

これが、計画の大きな枠組みです。

3. 「紙の計画」で終わらせないための実行装置：子ども家庭センター

計画を読んでいても、「実際にどこで相談できるのか」が見えないと、市民としてはどうしても“遠い話”に感じてしまいます。

そこで重要なのが、**2024年4月に設置された「町田市子ども家庭センター」**です。

3-1 子ども家庭センターとは

まちだ子育てサイトの説明によれば、子ども家庭センターはこう定義されています。

児童福祉法の改正を受け、すべての妊産婦、子育て世帯、子どもが安心して生活できるように、

母子保健（保健予防課母子保健係）と児童福祉（子ども家庭支援課）が連携・協働して、一体的な支援を行う「町田市子ども家庭センター」を2024年4月に設置しました。

妊娠・出産・子育てに関する様々な不安や悩み、困りごと、子ども一人ひとりの成長、家庭環境など、身近な相談に応じて、様々なニーズに即した必要な支援を行つてまいります。

ポイントは、

- 母子保健（健康）と児童福祉（相談・支援）を一体で見ていること
- 「どこに相談したらいいか分からない」というときの“入口”として機能していること

です。

3-2 「母子保健型」から「こども家庭センター型」への転換

「第二期町田市子ども・子育て支援事業計画」2024年度実績を見ると、

「利用者支援事業」が2024年度から**「母子保健型」→「こども家庭センター型」**に変わったことが分かります。

- 基本型：5か所（堺・忠生・町田・鶴川・南の各地域）
- 特定型：市庁舎

- こども家庭センター型：市庁舎・保健所・中町庁舎・健康福祉会館・鶴川保健センター（4か所）

2024年度には、

- 保育所等の利用調整に関する相談が延べ534件（窓口・電話437件＋Web97件）
- 支援が必要と判断された妊産婦との面接に基づき、延べ112件のサポートプランを作成し、妊娠期から子育て期までの継続支援につなげている

と報告されています。

言い換えると、「子ども家庭センター型」という形で、
“妊娠期から就学前までの切れ目ない支援”を本気で動かし始めた、ということです。

4. 保育・幼児教育：量は足りているのか、足りていないのか

4-1 「市全体では足りている」が、本当に見ているべきポイント

第二期子ども・子育て支援事業計画の2024年度実績資料には、
0～5歳児の「教育・保育ニーズ量」と「確保量」が地区別に細かく載っています。

全体で見ると、

- 教育・保育（幼稚園・保育所・認定こども園・小規模保育など）の確保量は、ニーズ量をおむね上回っている
- 「保育サービス提供率は毎年度目標値を上回る実績」と評価されている

とされており、
“待機児童が多数”という状況ではないことが分かります。

ただし、資料の数字をよく見ると、

- 南地域・忠生地域・町田地域・鶴川地域の間で、
0歳・1歳・2歳など年齢別のニーズと確保量には微妙な過不足がある
- 「市全体で足りている=どこでも希望通り入れる」というわけではない

という現実も見えてきます。

「町田は待機児童ゼロだから安心」という一言で片付けられない、
“地域差”と“年齢別のギャップ”がある、というのが正直なところだと感じます。

5. 学童保育クラブ：数は増えているか／入れない子はいるのか

5-1 入会児童数5,070人、入会待ちはゼロ

2024年4月1日現在の学童保育クラブ入会状況に関する資料によると、

- 入会児童数は過去最高の**5,070人**(前年比+279人)
- 低学年(1～3年生)の入会率は**41.3%**(1年生は48.1%)
- 4年生の入会率も**19.5%**まで上昇(前年から2.6ポイント増)
- 2024年4月1日時点で、入会待ち児童はゼロ(2022年度8人→2023年度0人→2024年度0人)

と報告されています。

町田市は、

小学1～3年生と障がいのある児童について、
受付期間内に要件を満たして申請した子は全員入会を承認する「全入」制度をとっている。

と明記しており、
「保育を必要とする低学年は全員受け入れる」という仕組みを、本当に現場で実現できている自治体と言えます。

5-2 高学年までの受け入れ拡大

「新・子どもマスタートップラン(後期)」の2024年度実績では、

- 学童保育クラブの対象を4～6年生まで拡大し、
- 学校の協力を得て育成スペースを広げ、定員を増やした結果、
- 高学年児童の受け入れ人数が**1,044人**に増加した

と報告されています。

つまり、「小3まで預けられる」から、「高学年まで継続して預けられる」学童へと、
町田は数年かけて構造を変えてきた、ということです。

6. それでも現場で聞こえてくる「4つのモヤモヤ」

ここまで見ると、

- 保育・幼児教育: 市全体としてはニーズを上回る枠を確保
- 学童保育: 全入制度+入会待ちゼロ、高学年受け入れ拡大
- 相談体制: 子ども家庭センター型で切れ目ない支援を強化

という意味で、

「箱」と「仕組み」は、かなり整ってきている自治体です。

それでもなお、30~40代の子育て世代から、次のようなモヤモヤを耳にします。

6-1 情報の届き方の問題:「制度はあるのに、知らない」

- 「こんな支援があるなんて知らなかった」
- 「適用条件が複雑で、自分が対象かどうか分からぬ」
- 「サイトやパンフレットを見ても、"自分の場合はどうなるか"がよく分からない」

第二期子ども・子育て支援事業計画の評価資料には、
保育利用の相談が延べ534件あったと書かれていますが、

裏返せば、

「相談できれば適切な情報にたどり着けるが、
そもそも相談に来ていない層も一定数いる」

とも言えます。

6-2 地域差の問題:「市全体の平均」と「自分のエリア」のギャップ

- 駅近の平坦エリア: 保育園・学童・公園・児童館・商業施設が密度高く集まっている
- 丘陵地・団地エリア:
 - 坂道+バス頼み
 - 子育て広場や児童館が徒歩圏内に少ないケースもある

- 雨の日や夜の送り迎えが物理的にしんどい

ニーズ量と確保量の数字を地区別に見ると、微妙な過不足があることが分かります。

「町田市全体として足りている」と、
「自分が住んでいるエリアで不便なく使える」のは、別の問題。

ここに、子育て世代のストレスの一部があると感じます。

6-3 時間とメンタルの問題:「制度だけでは埋まらない空白」

- 共働きフルタイム+保育・学童+家事+親のケア
- 「制度的には預けられる」が、送迎や準備でヘトヘト
- 子どもの相談に向き合う余裕が日々削っていく

子どもマスターplan25-34の基本理念には、

子どもが笑顔でいるためには、子どもだけではなく、
子どもを取り巻く大人も笑顔でいることが必要です。

と書かれていますが、
まさに**「大人の笑顔の余裕」が制度だけでは生まれない**ところに、今の難しさがあると思います。

6-4 子どもの「声」と「時間」の問題

CFCIやコドマチ条例によって、町田は

- 子どもの権利
- 子どもの意見表明・参画
- 子どもの居場所づくり

を前面に出し始めました。

しかし現場では、

- 「親も先生も忙しそうで、ゆっくり話を聞いてくれる大人がいない」
- 「相談したいけど、どこで何を話せばいいか分からぬ」

という子どもの声もあります。

制度としての「参画」だけでなく、日常の中で“話を最後まで聞いてもらえる時間”があるかどうか。

ここも、「子育てしやすさ」の重要な要素だと感じます。

7. 市民として今押さえておきたい「3つのポイント」

制度の全体像と現場の感覚の両方を踏まえて、

私・小沢タケルが「ここだけは最低限押さえておきたい」と思うポイントを3つに絞ります。

7-1 町田は「子どもマスタートップラン25-34」という“骨格”を持っている

- こども基本法に基づく「市町村こども計画」として位置づけられた中核計画
- CFCI・コドマチ条例・子ども発達支援計画・子ども・子育て支援事業計画などを束ねる役割

→ 町田は、“場当たり的な子育て支援”ではなく、骨格のある計画を持っている自治体である。

7-2 保育・学童の「枠」はだいぶ整ってきたが、「地域差」と「情報の届き方」が課題

- 教育・保育サービス提供率は目標値を上回る実績が続いている
- 学童保育クラブは全入制度+入会待ちゼロを達成し、高学年も受けられる体制を整えてきた

一方で、

- 地区ごとのニーズと確保量のギャップ
- 制度や窓口の“見えにくさ”

→ 「箱」と「仕組み」は整ってきているが、

“使える状態”まで情報が届いていない層がいる。

7-3 子ども家庭センターは、「困ったときの最初の一歩」として覚えておく

- 母子保健と児童福祉を一体的に扱う「子ども家庭センター型」が2024年度から本格稼働
- 妊娠・出産・子育ての相談を「どこにしていいか分からない」ときの入口

→ 町田で子育てをするなら、「困ったらまず子ども家庭センターに聞いてみる」という発想を持つておくと、孤立しにくくなる。

8. おわりに：

「子育てしやすいかどうか」を、スローガンではなく“構造”で語れるように

このレポートは、

- 「町田市子どもマスターPLAN25-34」本体と概要版
- 新・子どもマスターPLAN(2015～2024)の評価資料
- 第二期子ども・子育て支援事業計画 2024年度実績
- 学童保育クラブ入会状況 2024年4月1日現在
- 子ども家庭センター設置に関する公式情報

と、

町田市が公開しているデータと計画をベースに、

私・小沢タケルが市民の立場から整理した**「町田の子ども・子育ての現在地」**です。

「子育てしやすいまちかどうか」を、
いい・悪いだけで語らず、
“何ができるていて、どこに残された課題があるか”を、
具体的な数字と仕組みで語れるようにする。

そのための“地図”として、この文章を書きました。

町田に生まれ、町田で育ち、町田で暮らす一人の市民として、
小沢タケルはこれからも、

- 市の計画や実績を読み込み
- 現場の声を聞き
- データと生活実感の両方から

「小沢タケルの市民レポート」として、
町田の子ども・子育ての課題と可能性を一つずつ言葉にしていく。

この文章が、

「この人は、町田の子育て環境をちゃんと勉強して分析しているな」

と感じてもらえるきっかけになり、

あなた自身が「町田で子どもを育てるここと」を冷静に考えるヒントになれば、うれしく思います。

